Noodles Wars

蝙蝠傘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Noodles Wars

【コード】

N9648E

【作者名】

蝙蝠傘

【あらすじ】

カップ麺好きの男と給湯ポットとの息づまる戦いを描きました

カップ麺好きの大日清一郎は日曜日の昼に目が覚めた。
腹が減った。

嫁は実家に帰って子供の居ない清一郎は一人で昼食をとる。
流し台の引き出しの中には、嫁が買ってくるいつも決まったカップ
麺しかなかった。

近くのスーパーが売り出す特価品である。

安売りする商品は決まっているので、同じカップ麺が引き出しの中
に転がっているのである。

清一郎は「食べたいラーメンはこれじゃないんだ!」と心の中で叫
んだ。

そして近くのコンビニに出かけ新商品と銘打ってある、お気に入り
のカップ麺を買ってきたのだった。

ビニールを破りふたを半分開けて、鼻歌まじりにマイコン電動給湯
ポットのところまで行き、ロックを解除するためのロックボタンに
手をかけた。

その時である。

マイコン電動給湯ポットは98度と言う文字を青く光らせて、再沸
騰のランプを点滅させながら、二度三度身震いしたように見えた。

大日清一郎は再びロックボタンを押そうと指を伸ばした。

するとマイコン電動給湯ポットは後に滑ってその指をかわした。

「なるほど昨日カップ麺を食べようとしたら、麺の半分のところで
湯がなくなってしまった。それでこいつの頭を叩いたのがいけなっ
かたかな」清一郎はヤレヤレとした表情で思案しながら、マイコン
電動給湯ポットを眺めた。

象の鼻に似た配水口が動いた。

そして清一郎は見てしまった。

再び98度と言う文字を青く光らせて、再沸騰のランプを点滅させ

ながらゆっくり宙に浮かんでいるのを。

まるで遠い星から地球にやってきた、奇跡の宇宙人だと言わんばかりにユラユラ揺れていた。

清一郎はカップ麺を手にもったまま一瞬緊張が身体を走った。静寂の時間が過ぎる。

ガチャンと流し台の上でコップがはねて清一郎の視線が動いた。

マイコン電動給湯ポットはその隙をついた。

清一郎の顔面めがけて熱湯を噴射させようと、象の鼻に似た配水口を龍のようにくねらせたのである。

清一郎は腹が減っているハンデがあるものの、毎日腕立て10回、腹筋10回を欠かした事がない豪の男だ。

その瞬間、清一郎の右手の人さし指と中指は目にもとまらぬ早さで、マイコン電動給湯ポットのロックボタンに指を走らせた。

これぞまさに清一郎の絶技、(秘技、さざんかの宿)である。人さし指は中指を盾とし、中指は人指し指を援護する。もし、人指し指がすべっても、中指で決める。さらにとどめの人指し指が体勢を立て直して反転攻撃に入るのである。

毎日の鍛錬があつてこそその技。

これができるのは、日本広しといえど大日清一郎しかいない。まさに素早い身のこなしと、繊細な動きが全ての技である。

清一郎の指はロックを解除した。

ロックが解除されたマイコン電動給湯ポットの動きがやや鈍った。

一閃光芒が走り、清一郎の右手は瞬間移動で給湯ポットの頭に迫った。

ところがマイコン電動給湯ポットは、目にも見えない早さで回転すると、象の鼻に似た配水口で、彼の左上腕骨を強烈に殴打した。これぞ世に名高い(秘技、私の彼は左利き)である。

清一郎は体勢をぐらつかせながら、手にはカップ麺をしっかりつかんだまま、素早く後ろに跳んだ。

ロックが解除された象の鼻に似た配水口から、マイコン電動給湯ポ

ツトの究極技、必殺（お熱いのがお好き）がくりだされた。

摂氏100度の熱湯は清一郎めがけて、火炎放射器のように噴射された。

その勢いはまさに雷光の如く清一郎を襲った。

絶対絶命！

刹那、清一郎の身体は後方に反り返り、床と平行になって体をかわしながらも、右手から疾風怒濤の早さでカップ麺が滑るように弾かれた。

弾き出されたカップ麺は熱湯めがけて、円盤のように回転しながら飛んでいった。

空中乱戦、急行直下三段跳び！銀色の閃光を散らし空中に無数の円弧を描いた。

間一髪！

カップ麺は清一郎めがけて飛んでくる熱湯を、その眼前で見事に空中でダイレクトキャッチ。

啞然とするマイコン電動給湯ポットを尻目に、カップ麺はそのまま何ごとも無かったかのように清一郎の前にすべるように戻ってきた。そこには、美味しそうに白い湯気を立てているカップ麺があった。

それはあっけない幕切れであった。

清一郎は何もなかったかのようにおいしそうに食べた。

白い湯気が立ち昇る。

そしてその湯気の間こうで、98度と言う文字を青く光らせて、再沸騰のランプを点滅させてマイコン電動給湯ポットが、ニタツと笑いながら身震いしていた。

「このやろっ」清一郎はそう言うと言ったコードを引き抜いた。ヤレヤレとカップ麺に箸をつけた時、彼の目の前にポツカリ浮かんでる物体があるのに気がついた。

象の鼻に似た配水口が、清一郎の顔の前でぶらぶら揺れ、その先からぼたぼたとお湯がこぼれていた。

清一郎はあきれたように、再びマイコン電動給湯ポット頭を力まか

せに叩いた。

「新しいポットを買うか、それともT・何かの電気ケトルにするか」清一郎はそういつてカップ麺を上手そうに食べたのだった。瞬間！マイコン電動給湯ポットのコードが、清一郎の身体に巻きついてきた。

清一郎はそれを待つてたかのようにニタリと笑ったが、同時に身体がゆっくり回転を始めた。

マイコン電動給湯ポットはコードを思いっきり引張ったのであった。駒が回る！

清一郎が回る！回る！回る！

マイコン電動給湯ポットの伝説の絶技（夢想花）が遂に出た。しかし清一郎は回転しながらも、その両眼が鋭く光った。

稲妻顔負けの銀色の閃光が、マイコン電動給湯ポットに迫る。

こうして、何時果てるともない戦いが、延々と繰り広げられているのであった。

我が愛するカップ麺をただ食べたいために、朝ともなく、昼ともなく、夜ともなく。

それは嫁が実家から、永遠に戻って来ない気配を、色濃く漂わせながらも、戦いは止む事はない。

(後書き)

カップ麺を食べる時、麺の半分くらいのところでお湯が無くなる事が多々あったので悔しさ紛れにこれを書きました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9648e/>

Noodles Wars

2010年10月20日19時15分発行